一般演題（口演）

災害医学

O-71 X線検出器（イメージングプレート：IP）に付着した放射線同位元素の除染

小沼洋治[1)]，林美智子[1)]，林　裕晃[2)]，西原貞光[2)]
独立行政法人　労働者健康福祉機構　鹿島労災病院[1)]，
徳島大学大学院　ヘルスバイオサイエンス研究部　保健化学部門[2)]

2011年3月11日に東日本大震災が発生した．この大地震と津波によって福島第一原子力発電所も被災した．この事故により，東北地方及び関東地方を含む広範囲に放射線同位元素（以下RI）が飛散した．当院では，3月16日の午後2時頃，臨床写真に黒点が発生していることに気がついた．まず，ビルトインタイプのイメージングプレート（Imaging Plate：IP）を内蔵するデジタル画像装置で発見され，続いてカセッテタイプでも数例確認された．時期を同じくして，近隣の病院からも同様の黒点が発生しているとの報告を受けた．これらの黒点は，RIがIPの近くに長時間存在した場合に，RIから放出されたβ線及びγ線をIPが検出することで生じる．

各施設において黒点が発生した場合，メーカ側は本体およびカセッテやIP等をクリーニングするとともにIPを一時消去するように，ホームページ上で勧めている．一方，IPのクリーニング方法については取扱説明書に以下の注意事項が記載されている．(1) 直射日光の当たらない場所で行うこと．(2) キズつけたり変形させたりしないように注意すること．(3) 綿製不織布やガーゼ等の柔らかい布で軽く拭くこと．(4) 水で湿らせ汚れを拭き取ることは絶対にしないこと．

西原らは，ウエットタイプの化学雑巾を用いてRIが除染できることにいち早く言及し，その方法論を提案した．ウエットタイプの化学雑巾を除染に用いるアイディアは，林らが報告した床面の汚染検査で，ウエットタイプを用いた時の拭き取り効率がドライタイプのものよりもはるかに高かったという結果に基づいている．

この発表では，ビルトインタイプのIPを内蔵するデジタル画像装置に対して，西原らによって提案された除染方法の実践例の報告および除染率の解析結果と，ゲルマニウム検出器を用いたガンマ線放出核種の定量結果についての報告を行う．

一般演題（口演）

東日本大震災

O-72 東日本大震災・原発事故直後2週間の緩和ケア病棟の現状報告～病棟看護師の聞き取り調査から～

菊地真由美
福島労災病院

【はじめに】2011年3月，福島第一原発の50km圏内に位置するA病院の緩和ケア病棟看護師は，東日本大震災と原発事故を経験した．災害当時を振り返り緩和ケア病棟の現状について医療者と患者の両面から報告する．【方法】緩和ケア病棟看護師18名に対し震災後2週間を振り返り，最も辛かった事項について「医療者」と「患者・家族」の両面において聞き取り調査を実施した．【結果】「医療者」避難を希望する家族と専門職として職務遂行の葛藤による苦悩が最多であった．薬品・医療用物品・生活物資・ガソリン・食糧の不足による先の見えない不安，原発の爆発や頻回の余震への恐怖，子供を避難させた家族離散の生活，調剤薬局・商店の閉鎖，ライフラインの不備による看護ケアへの不全感．院内患者を集約させ緩和ケア病棟患者は最期まで残る覚悟の基に勤務し，スタッフ不足には2交代勤務の検討と実施で対応した．疼痛・症状コントロールの問題はなかった．再認識した事は，支援に対する人の温かさ，団結力の強さ，専門職としての誇り等であった．＜患者・家族＞余震への恐怖や家族に見捨てられた不安感からナースコールが頻回となる．家族の避難により家族写真をベッドの上に並べて無口になる．寒い避難所よりも入院を希望．津波により帰る家が崩壊．死を待つ患者より子供が大事と避難した家族，患者を残し避難できないと一家で談話室や家族控室に宿泊した家族がおり，ホスピスの語源である「人をもてなす・癒す」という緩和ケア病棟の役割を震災時において果たすことが出来た．【考察】V.E，フランクルは人間の生きる価値として，創造価値，体験価値，態度価値を挙げている．私たちは，大震災と原発事故という人生最大の危機を体験し，自分の人生に与えられた試練を受容することで自分の役割や使命を認識できた．さらに，新たな人間関係を創造し医療職として，また緩和ケア病棟の価値を実現しようとする真摯な態度で危機を乗り越えることが出来たと考える．【結語】大震災と原発事故直後の2週間における看護師の苦悩は，避難を希望する家族と専門職としての職務遂行の葛藤によるものが最多であった．